

阿毘達磨仏説論と大乘仏説論

——法性、隱没經、密意——

本 庄 良 文

【0.】本稿は無著、世親、清弁の大乘仏説論¹⁾と『大毘婆沙論』『順正理論』にみえる所謂毘婆沙師の阿毘達磨仏説論との共通性に着目し、これら的大乘仏説論が有部（及び同類の他部派）の阿毘達磨仏説論に多くを負うていることを示そうとするものである。①「仏の直説でなくとも法性に叶へば仏説である」との理論、②經の隱没の理論、③密意説（了義・未了義）の理論が、阿含にも典拠がある特に重要なものであると思われるので、これを中心に見ていきたい。

【1, 1. 婆沙の法性説】『大毘婆沙論』（大27）の冒頭に論藏が仏説であることについて凡そ次のような記述がある。

①阿毘達磨は仏自身が「法性」を明かされたものである。

②阿羅漢迦多衍尼子は『発智論』を著述したのではなく、仏が散説した直説を編纂したにすぎない。大徳法救が『ウダーナ』を編んだ如くである。

③あるいは、『発智論』は仏の直説ではなく、迦多衍尼子独自の著述であるとも解釈できる。この場合も、仏の説であれ、弟子の説であれ、法性に違わなければ仏説として受持してよいと仏自身が認めたからやはり仏説である。

④三藏はみな等しく仏説であるが、經藏は初心者、律藏は中級者、論藏は上級者のためのものである²⁾。

經・律二藏は仏の直説としての仏説である。他方、阿毘達磨藏は直説と考えることもできるし、仏の直説ではないが法性に叶うという意味で仏説である、と考えることもできる、というのである。

遡って、阿含において仏説・非仏説の判定を述べるのは『大般涅槃經』である。パーリの伝承では、ある言葉を「經の中に入らしめ、律の中に示す」ことができるなら仏語であると断じよというのみであるが、有部の伝承ではさらに「法性に違わない (dharmaṭāṃ na vilomayati)」という条件が付加されている³⁾。有部阿含には、有部阿毘達磨の理論の発展の反映として逆に付加が行われたと推定される例が多いが⁴⁾、この付加もそれらと軌を一にするものであろう。

【1, 2. 婆沙の隱没説】仏説についてさらに注目すべきものとして『大毘婆沙

論』には「経の隠没 (antar√dha)」の理論がある。阿毘達磨には六因説など現存經典にない概念がある。これも「法性に叶えば仏説」なのであるが、経に直説されているに越したことはない。そこで強いてこれを仏の直説であったと主張するために提出するものである。巻十六に、六因は経説ではないとする説を一往述べた上で次のように言う。

六因もまた増一阿含の増六品中に説かれていた。時を経て「隠没」したその経文を迦多衍尼子が願智 (pranidhijñāna)⁹⁷ の力で観察し、『発智論』中に配置したのである。伝承がある。増一阿含は本来増一品より増百品までであったが増十一品以降は「隠没」し、増十品までの中にも欠落した経は多い、と。また伝承がある。阿難の弟子であったある阿羅漢が亡くなるや、莫大な量の経論が「隠没」した、と。一人亡くなっただけでもこうであるから、現在に至るまでに「隠没」した経論は量り知れない。ゆえに六因は経説である⁹⁸。

仏説の隠没の考えもまた雑阿含経906 (=SN 16, 13), AN 6, 154-156 (vol. iii, pp. 176-180) などの阿含に遡る⁹⁹が、増一阿含の記述に直接関わる「百増」説は大衆部の律蔵にも記載されている⁹⁹。

【1, 3. 婆沙の密意説】 また、阿含において相互に矛盾するかに見える仏説がある場合、毘婆沙師は、両者が仏説であることを認めた上で、一方を了義 (nīta-rtha)、他方を未了義 (neyārtha=不了義) とした。了義とは言葉通りに受け取ってよい説である。未了義とはその逆であり、裏に隠された（多くは仏の衆生救済のための）意図 (abhiprāya=密意) を読みとるべき説である。一例のみ示せば、正統有部は仏の生身を有漏（煩惱の対象となり、煩惱を増大させる）と考えるが、無漏と取れる経文については「法身を密意している」とする⁹⁹。

【2, 1. 経量部の仏説観】 経量部 (Sautrāntika=Dārṣṭāntika, 譬喩師) は有部の経・律蔵のみを仏説と認め、論蔵 (六足・発智) の仏説性を否定した。称友によって「経を量とし論 (śāstra) を量としない者」とされる¹⁰⁰が、経を量としない仏教学派などありえないから、「有部内部にありながら有部論蔵を仏説と認めない学派」が基本的な意味と取るべきである。この名称は文献の上ではシュリーラータの自称が初見であると言われる¹⁰¹が、称友は『大毘婆沙論』中の「経量部」説を紹介し¹⁰²、かつ譬喩師は経量部であると言っている¹⁰³。称友は現代の我々とは比較にならない多くの経量部文献を読むことができた。譬喩師が成立した時点で既にこの名称もあったと考えたい。三世実有説等を否定していること自体、譬喩師が有部阿毘達磨の仏説性を認めていない証拠だと思うからである。

【2, 2. 經量部の阿毘達磨非仏説論と衆賢の反駁】 經量部が阿毘達磨仏説論に投じた批判の最初期のものは無論残されてはいないので、ひとまず『順正理論』による¹⁴⁾と、

①阿毘達磨論書は迦多衍尼子等が作製したと伝承されている。

②仏は阿難に「私が死んでからは sūtrānta に依れ」と説かれたが、阿毘達磨に依れとは説かれなかった。

③諸部派の阿毘達磨はそれぞれ宗義が異なっている
という三点があげられる。衆賢の反論の骨格は、

①阿毘達磨は大声聞たちが仏の教えに従って結集し、仏の承認されたものであるから仏説である。仏説であるかどうかは仏の教えに適合しているかどうかによる。さもなくば弟子所説の經も捨てねばならない。

②阿毘達磨に依れと仏が説かれなかったから仏説ではないというなら律も仏説ではない。

③部派相互間で異なっているから仏説ではないというなら經も仏説ではないのように纏められる。第一の反論は「法性に叶えば、たとえ弟子の説でも仏説である」という考えである。第二、第三は、阿毘達磨が仏説であるという積極的な主張というより、「阿毘達磨が仏説でないなら經も律も仏説ではなく、經も律も仏説なら阿毘達磨も仏説である」という論法である。特に、「相互に異なっている」との論法に注意したい。

【2, 3. 正理の隠没説】 他にも『順正理論』の処々に仏説論が展開されているが、譬喩師（＝經量部）「上座」の批判を拒けて九十八随眠を設定する箇所は特に興味深い。すなわち、

上座は「仏が九十八随眠を説かれた箇所はない」と言うが、どうしてそれが解るのか。伝承によれば、本来増一阿含は増百品までであったが、遂に増十品までが残るのみとなり、増十品までの經にも失われたものは多い。したがってこの阿含の中の随眠を説く所に詳しく九十八随眠を説く文があったのである

と、『大毘婆沙論』と同様の「百増説」に基づく隠没經の理論を適用する。さらに衆賢は阿含自身の中に、失われた經についての記述があるとして、①婆拏梨、②苦蘊、③大空、④烏陀夷、⑤薄伽梵他、⑥出愛王、⑦瞿博迦、⑧滿、⑨藍薄迦、⑩聖者護国、⑪趣、⑫涅槃の諸經を引用する。たとえば、『大空經』の中で、阿難が「世尊はかつて釈迦族の大城という町で私に空を説いて下さったがそれを私は理解した」と述べているが、大城で世尊が阿難に説かれたはずの教説は經と

して残されていない、などと言い、多くの経が「隠没」しているのであるから「仏が九十八随眠を説かれた箇所はない」とは言えない、と主張して阿毘達磨の権威を守ろうとするのである¹⁵⁾。

【2, 4. 阿毘達磨仏説論の纏め】以上、『大毘婆沙論』から『順正理論』に至るまでの阿毘達磨仏説論の根拠に①法性の理論、②隠没経の理論、③密意説の理論のあること、『順正理論』ではそれに加えて¹⁶⁾経量部の「阿毘達磨非仏説論」に対して、④阿毘達磨が非仏説なら経(律)も非仏説であり、経(律)が仏説なら阿毘達磨も仏説である、とする論法があることが確認できた。

【3, 1. 莊嚴経論】大乘仏説論の体系的な叙述は無著の『大乘莊嚴経論』『成立大乘品』、世親の『釈軌論』第四章、清弁の『中観心論思釈炎』第四章「声聞真実決択品」などに現れる¹⁷⁾。

『大乘莊嚴経論』では、①「大乘は、経に入り、律に見られ、法性に違わないから仏説である」なる第11偈に『大般涅槃経』以来の法性の理論が見られる。②経の隠没の理論は明白には現れない。ただ「未だ学ばざる經典を誹謗することは不合理である」とする第19偈は隠没経の理論の意図するところと合致する。③密意説の理論は「言葉通りの意味あるものではない」とする第7偈、それを敷衍した第14-21偈、特に、第20偈に見える。④また、内容的には異なるが、第7偈の「声聞乗あれば大乘あり。大乘なければ声聞乗なし」との論法は、「阿毘達磨が非仏説ならば経も律も非仏説であり」云云を想起させる。

【3, 2. 釈軌論】次に『釈軌論』の例を見るに、議論前半の纏めの偈に、

【世親】どうして[大乘は] 仏説ではないのか。【声聞】[互いに] 矛盾するからである。【世親】[それなら] 他方(声聞乗)も同じである。【声聞】それ(大乘)が了義であるとは全く知られない。【世親】[隠没した経もあるのだから] 了義[説]がないとどうして解るのか。[大乘は] 言葉通りの意味あるものではない。

とあるが¹⁸⁾、ここには②隠没の理論、③密意(了義・未了義)の理論、④「相互に矛盾するから大乘が非仏説であるなら声聞乗も同じだ」との論法がそろって見られる。また世親は「声聞乗でもまた仏説すべてが残っているわけではない」といって『順正理論』と同じ十二経を含む、十四経、さらには「百増説」をも提出している¹⁹⁾。

また「仏説の定義は何か」と問い、声聞乗者が提出する「定義」を逐一批判して、最後に「聖諦経に入り、煩惱の調御(律)に現れ、縁起の法性に不相応でないものが仏説である」と言うのに対しては「文字通りにか、意味的に」か」と問

い、文字通りにであるなら聖諦経以外はすべて仏説ではないことになる。意味的にであるなら、どうして大乘はそこに意味的に入らず、煩惱の調御に現れず、縁起の法性に不相応であろうか、としている²⁰⁾。

【3. 3. 思沢炎】清弁の議論にも「聖諦経にも入り、煩惱の制御にも見え、縁起なる法性との相違せざるものこそ仏言である、といえることすべてが大乘において成立する」「十八部派もすべて各自の所依の経等に入るといへども、相互には大なる相違がある。大乘も亦、（中略）声聞等の経等の三蔵には全く入らないけれども大乘の経等にも入り、菩薩の七百学処にもあらわれ、空性として説かれた法性とも相違しない」²¹⁾とあり、『順正理論』『釈軌論』の引くのと共通する十四の経が引用されている²²⁾。密意の理論は広く展開されてはいないが、中観派が未了義とする如来蔵説、アーダーナ識説も仏説として擁護するのはこの理論を前提としている²³⁾。

【4. 総括】複雑多岐に亘る論戦の細部を省略して両仏説論を比較すると、共通する三、四の原理に還元することができる。①現存する聖典に見られない理論でも、法性に叶えば仏説であり、②隠没した経の中に説かれていたかも知れず、③自分の建てる「法性」と矛盾した仏説があっても未了義であると主張することができるなら、極端に言えば、任意の説を仏説とすることができるのである。新しい資料に依ったが、もしこのような原理で仏説・非仏説の論戦が古くからなされていたと仮定できるなら、有部正統派の（特に経量部を対論者とする）阿毘達磨仏説論がそのまま大乘者の（声聞乗者を対論者とする）大乘仏説論につながっていったと言えよう。とすれば部派仏教徒たちが天魔の説と呼んだ「大乘」に根拠を与えたのは、皮肉にも彼らの、自宗を擁護する理論そのものであった。

1) 高崎直道「大乘仏教の〈周辺〉補論 大乘非仏説論の諸資料」『講座・大乘仏教10』春秋社、1985年、pp. 18-34.

2) 大27, 1a-2a11.

3) E. Waldschmidt, *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil II, 1951, Berlin, pp. 238-252.

4) 拙稿「三世実有説と有部阿含」『仏教研究』12, 1982, pp. 49-61.

5) *Abhidharmakośakārikā*, vii, 37ab.

6) 大27, 79b3-17. 『順正理論』巻15（大29, 416b）参照。

7) 佐々木教悟『インド・東南アジア仏教研究Ⅲインド仏教』pp. 282-286.

8) 平川彰『律蔵の研究』山喜房, p. 766; 前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』山喜房, p. 667.

- 9) 大27, 871c18. 宮本正尊『大乘と小乗』八雲書店, 1943, p. 114.
 - 10) Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā, ed. Wogihara, p. 11, ll. 29-30.
 - 11) 加藤純章『経量部の研究』春秋社, 1989, p. 88; p. 197.
 - 12) 白館戒雲氏御教示. Ed. Wogihara, p. 673 l. 9ff.
 - 13) 加藤純章『経量部の研究』p. 99. 『順正理論』も経量部と譬喩師とを区別しない。同書 p. 240参照。
 - 14) 大29, 329c-330c. 安慧俱舍論釈 Tattvārthā, To 27a2-30a2 をも参照。この部分の和訳を松濤泰雄が『法然学会論叢』に掲載予定。
 - 15) 赤沼智善『仏教經典史論』法蔵館, 1981再刊, p. 44及び復本文雄「初期仏教思想の生成——北伝阿含の成立」『岩波講座東洋思想第八巻インド仏教1』岩波書店, 1988, p. 109, ll. 1-6 及び p. 39 註(39)は引用そのものが隠没経であると誤解している。
 - 16) 「阿毘達磨は了義・未了義を判定する基準である」(大29, 330a20-21) など。
 - 17) 三つの大乘仏説論については高崎前掲論文の前に以下の論文が発表されている。本稿の以下の論述は言うまでもなくそれに依拠している。野澤靜證(1)「印度における大乘仏説非仏説論(大乘莊嚴經論成立大乘品の研究)」『大谷学報』22, 3, 1941, pp. 45-71; 同(2)「清弁の声聞批判(上)——統印度に於ける大乘仏説非仏説論——」『密教研究』88, 1944, pp. 66-79; 同(3)「清弁の声聞批判——インドにおける大乘仏説論——」『佐藤博士古稀記念仏教思想論叢』山喜房, 1972, pp. 209-225; 同(4)『函館大谷女子短期大学紀要』5, 1973, pp. 203-221; 江島恵教(1)「Bhāvaviveka の聖典観」『印仏研』17, 2, 1969, pp. (70)-(75); 同(2)「Bhāvaviveka の小乗聖典批判」『印仏研』18, 2, 1970, pp. (98)-(103); 高崎直道「如来蔵思想をめぐる論争——清弁造『中観心論』声聞真実決択章を素材として——」『仏教思想史3』〈仏教内部における対論〉インド篇, 平楽寺書店, 1980, pp. 219-256; 山口益(1)「世親の釈軌論について」『山口益仏教学文集』下, 春秋社, 1973, pp. 153-188 (再録); 同(2)「大乘非仏説論に対する世親の論破」前掲『文集』下, pp. 301-320. 三つの大乘仏説論以外については註1 高崎論文p. 19 参照。他に寂天『入菩提行論』ix, 42-44 (若原雄昭氏御教示) 龍樹『宝行王正論』4, 67-100がある。『入大乘論』(大32)冒頭には仏語についての議論がある(松田和信氏御教示)。
 - 18) Pek.Si 123a8-b1.
 - 19) Pek.Si 114b2-116b6.
 - 20) Pek.Si 124a6-125a3.
 - 21) D.Dza 166a1-4. 野澤第三論文 pp. 212-213 の和訳を借用。
 - 22) 江島第二論文参照。
 - 23) 註17高崎論文 p. 236参照。(1989. 8. 28.)
- 〈キーワード〉阿毘達磨仏説論, 大乘仏説論, 法性, 隠没, 密意

(神戸女子大学専任講師)